# 関野貞の朝鮮時代絵画調査と朝鮮名画展覧会
## —東京文化財研究所所蔵の調査カードから—

Dr.Sekino Tadashi who researched Choson dynasty paintings,
and 'Choson Fine Paintings Exhibition', considering with the cards
in the possession of National Reseach Insutitute for Cultural Properties, Tokyo

美術学科
渡　邊　雄　二
YUJI WATANABE

### はじめに

日本の中世における禅林の画家の立場を考える際に禅僧としての側面、また、専門絵師としての側面は語られることが多いが、さらに日本が東アジアの文人文化を共有する地域として、彼等の文人的な面について考えたいと思った。そして、文人、士大夫文化の中心である中国の絵画をいかに受容したかを考える上で、同時代の隣国である朝鮮王朝における書画家の様相を知りたいと思った。

しかし、その様相は日本の禅林の画家の意識とはかなりかけ離れていたようで、儒学の崇儒重道的視点から絵画を末技、末芸とする考えを反映して語られる。たとえば朝鮮時代初期の士大夫姜希顔（クァン・ヒアン）が「書画は賤技の一つであり、（自身の作品を）後世に伝えれば恥となる」とし、文人余技としての書画におぼれることをいましめるが、その反面姜希顔の弟姜希孟（クァン・ヒモウ）は「事物の中で、人を十分に喜ばせ伝えることができるものにおいて書画ほどのものはない」というように、書画の修養的な利点も示している。このように朝鮮時代の絵画では、日本の水墨画の制作において考えることが少ない儒教的な、また、いかにも文人的な価値観をもっていたように思われる(注1)。

江戸時代の日本においては、朝鮮通信使に同行した画員などの画家について関心があった（『古画備考』五十巻「高麗朝鮮画人伝」）ようだが、その絵画の意義、位置づけについて同時代の日本人がどのように考えていたのかなど朝鮮時代絵画と日本とのかかわりを探っていた(注2)。

そうした考察を経て、日本における朝鮮時代絵画の受容のようすを知るための調査の中で、東京文化財研究所に日本や中国の絵画と同様に朝鮮時代絵画の調査写真カードがあることを知り、調査させていただいた。さらに同研究所には関野貞が鉛筆で手書きした調査カード（フィールドノート）があることを教示いただき、あわせて調査させていただいた(注3)。

周知のように関野貞（1867-1935）は建築史家であるが、日本国内ばかりでなく中国や統治下朝鮮で建築、遺蹟の調査にあたり、多くの論文のほか、調査報告書をのこし、『朝鮮美術史』（1932年）『朝鮮の建築と美術』（1941年）など韓国美術史、絵画史についての著書があり、東アジアの未知であった史跡の確認に寄与した。統治下朝鮮の美術史を構築しようとした功績は非常に大きい。

文化財研究所の関野貞の調査カードは、ほとんどが朝鮮時代絵画資料を対象としたものである。各カードには調査箇所、期日が記入されており、氏の調査の動向を細かく伝えている。こうした関野貞の調査カードは東京大学総合博物館と奈良国立博物館で保管されるものが知られているが、本調査カードについてはいまだ報告されていない(注4)。

当初、東京文化財研究所所蔵のこれら写真調査カードと調査カードとの関連性は想定できなかったが、調べていくとそれらが決して無関係ではないことに気づいた。両者をつなぐのは、おそらく朝鮮名画展覧会であろうと考える。朝鮮名画展覧会は1931年東京府美術館で開催された。内容は朝鮮時代の絵画を中心に仏画や古墳の複製画など

韓国の絵画資料を網羅したもので、この展覧会の目録である『朝鮮名画展覧会目録』をみると、255件の作品が出品されたことになっている。しかし、韓国中央大学校の権幸佳氏によれば実際には400件ほどの大規模な展覧会であったという(注5)。この展覧会の出品作品の一部を記録したのが、東京文化財研究所の写真調査カードであろう。それらには展覧会会期中の撮影の日付があり、この会期中に作品を撮影し、文化財研究所の前身である美術研究所でカード化したものと思われる。

そして、この朝鮮名画展覧会の開催に大きく貢献したのが関野貞である。「関野貞日記（以下、日記）」(注6)によれば、この朝鮮名画展覧会の展示や開催中の来賓案内など関野が率先して行ったことが克明にうかがえる。この会期の後に主催者の一人であり、かつ出品者であった呉鳳彬（オ・ボンビン）が東京で記者に語った記事によると「昨秋（1930年）わが朝鮮美術館主催、東亜日報社後援で開催された朝鮮古書画珍蔵品展覧会に関野博士が参観することになりました。その時、私がこのような展覧会を東京で一度開催しましょうと関野博士に申しました。博士は快く有意義な事業と仰られ、帰国後東京側と議論し確定することとなりました。」と語り(注7)、およその経緯が知られる。

関野貞の調査カード（フィールドノート）はこの展覧会の前後を中心に朝鮮時代絵画の調査を行い、記録したものである。カードの日付と日記の記録がほぼ符合する。すなわち調査カードは日記に記される調査活動の内容を具体的に記録したものである。調査箇所と調査対象資料をときに克明に銘文を記録しており、すでに重要作品と考えられていた安堅の「夢遊桃源図」は所蔵者の動向についても史料を掲げて言及している。

本論ではこれら2種類の調査カードの概要を示し、これを所蔵する東京文化財研究所（旧美術研究所）と関野貞の朝鮮美術の調査動向、朝鮮名画展覧会の開催などとの関わりから、近代における日本の朝鮮時代絵画の調査、研究の様相をうかがい知ることができればと思う。なお、本論では第二次大戦終了前の韓国を示すのに統治下朝鮮あるいは朝鮮という言い方をすることをお断りする。

## 1　朝鮮名画展覧会

1931年3月22日から同年4月4日に開催されたこの展覧会については、開催会場となった東京府美術館の開催展覧会の記録(注8)にも記されることなく、今日ではほぼ忘れられた展覧会となっているのではないだろうか。管見では当展覧会については、日本においてはほとんど研究が行われていないように思われる。ただし、展覧会の内容については「朝鮮名画展覧会目録」(注9)によりうかがい知ることができる。目録の諸言によれば名誉総裁に李王垠殿下をいただき、朝鮮側委員は朝鮮総督府博物館、李王家博物館などにつづき、朝鮮美術の調査を柳宗悦とともに行った浅川伯教、当時李王家博物館の職員であった末松熊彦（謙澄）、朝鮮美術館主呉鳳彬、東洋美術史を専門にした京城大教授田中豊三らが挙げられ、日本側委員として関野貞をはじめ帝国美術院会員岡田三郎助、和田英作、藤島武二、鏑木清方、二科会会員石井柏亭などの作家、そして、美術史家大正大学講師脇本楽之軒らが記される。なお、この展覧会については東京朝日新聞にいくつかの記事が掲載され、同社が後援主催したと思われる。いずれも関野貞が執筆し、氏が講演会も催した。

写真1　東京府美術館

東京朝日新聞の1931年3月22日版には朝鮮名画展開催の記事が載る。内容は安堅の夢遊桃源図が所蔵者を委員が説得して出品されたことを記す。「参萬円の保険」をつけ、美術学校教授田邊孝次

が集荷し、さらに28日から5日間のみの展示という条件であった。同日の記事に24日に開催した「朝鮮の夕」の告知も掲載する。これは東京朝日新聞社の講堂で開催され、関野貞の「朝鮮の絵画について」という講演や朝鮮のフィルム上映を行った。3月28日の記事には李在寛の山水人物図の写真を掲げ、本展覧会の出品作である事を記す。4月2日からは関野貞の「朝鮮の絵に就て」という連載記事が、3日、6日と3回に分けて掲載された。

展覧会は目録によれば資料を時代順に並べるという構成である。朝鮮時代の絵画については書画家伝が編まれなかったのであるが、今日の研究から見ても、かなり詳しく正確に把握した内容を示している。

この展覧会については脇本十九郎（楽之軒）が論文の中で「一昨々年国民美術協会は李王家博物館及び朝鮮総督府の賛同を得てやや大規模の朝鮮画展覧会を開いたが、何れもさしたる反響なくして止んだのに見ても、如何に日本人が朝鮮画に冷淡であるかが窺われる。」(注10)と述べており、この展覧会が当時の関心を呼ばなかったことを記している。

この展覧会の開催の契機は先述したように、これに先立って開催された京城での朝鮮時代書画の展覧会「古書画珍蔵品展」（1930年10月17日～22日）である。東亜日報の同年10月10日の告知には場所は東亜日報社楼上とある。主催は朝鮮美術館、後援は東亜日報である。

権幸佳氏の研究によれば、この時期、京城において朝鮮時代以前の美術品への関心が高まり、朝鮮美術館の設立（1929年）、朝鮮時代書画展（1930年の古書画珍蔵品展など）の開催などが盛んに行われた。こうした動きは民間ばかりでなく、すでに李王家博物館、朝鮮総督府博物館などにおいても資料蒐集が行われ、1930年代には収集の動きから展示などへ移行したとしている(注11)。

ちなみに李王家博物館は1908年李王が徳寿宮から昌徳宮へ別居するにあたり、王の新居に趣味を感じられる施設を依頼された李王家職員小宮三保松らが動植物園と博物館の創設を提案した(注12)。その指揮下にあった末松熊彦、下郡山誠一ら二人と図って発掘品ほか各種の芸術品を買収した。1909年11月1日動物園、植物園、博物館を昌慶苑で公開した。1912年には所蔵品は1万2千2百3十点を数えた。1909年には徳寿宮に石造殿がつくられ、1938年には同所で展示館を持った李王家美術館として近代美術を展示した(注13)。

朝鮮総督府博物館は1915年に開館した。景福宮内東側、現在の国立民俗博物館の位置にあった。これは1915年に開催された朝鮮物産共進会の美術館建物を本館として12月1日に開館したものである(注14)。

写真2　李王家博物館

写真3　朝鮮総督府博物館

李王家の所蔵品目録は李王家事務によって日本語で作成されており、明治41年1月以降同44年1月までに収集された書画資料を掲げている。

なお、1921年には柳宗悦らによる朝鮮民族美術展覧会が神田流逸荘で開かれ、京城では1924年、朝鮮民族美術館での展示が行われた。これら

は柳の朝鮮美術への関心を示したもので、すでに彼の事跡の中で示されている。

さて、京城での近代以前の書画の蒐集および展示であるが、その大きな中心となったのが呉鳳彬が主催した朝鮮美術館であった。朝鮮美術館のようすについては資料が少なく、場所が光化門通り交差点、現在の世宗文化会館の裏ということが知られるくらいだという。呉鳳彬は父親から天道教を信仰しており、抗日独立運動とつながりがあった人物である。朝鮮美術館を設立するのは呉世昌の影響があったとされる。

呉世昌については五十嵐公一が『古画備考』に関連して、『槿域書画徴』の成立の際にその人物像、すなわち政治的な活動ばかりでなく、文化的活動にも触れている(注15)。また、権幸佳氏によれば、呉世昌の鑑定力は絶対であった。

この朝鮮美術館が主催して開催したのが「古書画珍蔵品展」である。会期は1930年10月17日から22日で、会場は東亜日報社屋3階ホールである。後援は東亜日報社学芸部である。この旧社屋は現存する（ソウル特別市鍾路区世宗路）。もともと3階建てであったが6階建てに改築されている。

写真4　東亜日報本社旧社屋

展覧会の目録が残され、98点の出品を記録する。これらは民間の所蔵品が主で李王家博物館や朝鮮総督府博物館の所蔵品は含まれない。

この展覧会に触発されて、日本で開催したのが朝鮮名画展覧会である。出品目録では日本と朝鮮地域から集められた作品255件のリストが記される。先述したように権幸佳氏が言及するように追加の作品があったようだが、その一部リストが東京文化財研究所に残され、それには16件の追加資料と正誤表が載せられる(注16)。

展覧会の出品者は先に挙げた李王家博物館、朝鮮総督府博物館などの施設のほか京城の著名な個人所蔵家である金瓚永、李秉直、金容鎮、朴栄喆、李漢福、羅重鎬、呉世昌、朝鮮美術館の呉鳳彬、晋州の朴在杓など朝鮮の個人所蔵者の作品に加え、在京城の日本人所蔵家の和田一郎、富田商会、日本の帝室博物館、東京美術学校、大倉集古館のほか、浅草寺など寺院、そして、個人所蔵の柳宗悦、小倉武之助などから出品があった。さらにこの展覧会を京城で開催したというのが「朝鮮古書画珍蔵品展覧会」で会期は1932年10月1日から5日までである。

日本においては、この朝鮮名画展覧会以降は同年、文明商会の李禧燮（イ・フィソプ）が東京、大阪で4回開いた「朝鮮古美術工芸展覧会」、朝鮮工芸品展覧会、1934年に開かれた「朝鮮中国名作古書画展」などに開催は限られ、朝鮮時代絵画の大規模な展示は再び行われなかったようだ。

## 2　東京文化財研究所所蔵の朝鮮時代絵画カード

B4版よりやや大きな（27.0cm×38.1cm）美術研究所の名が記されるカードに写真と粉に、時代、流派、作者、命題（題名）、材料、大サ（大きさ）、所在、複製出所、購入、備考の項目がある。このなかで備考に撮影日と「朝鮮名画展目録」の番号が記されるものがある。294件のカードのなかでこの目録の番号を付しているものは75件である。そして、それぞれに撮影の日付があり、それは展覧会会期の昭和6年3月26日から4月4日の間である。すなわち展覧会の会期中に撮影調査されたものであろう。

そのほかのカードで昭和7年9月1日の日付があるものが58件ある。これも展覧会など作品がまとまって集められた機会に撮影されたものと思われる。しかし、日本においては朝鮮名画展覧会の後にはそうした催しは見当たらない。

東京文化財研究所には美術研究所の書式の調査

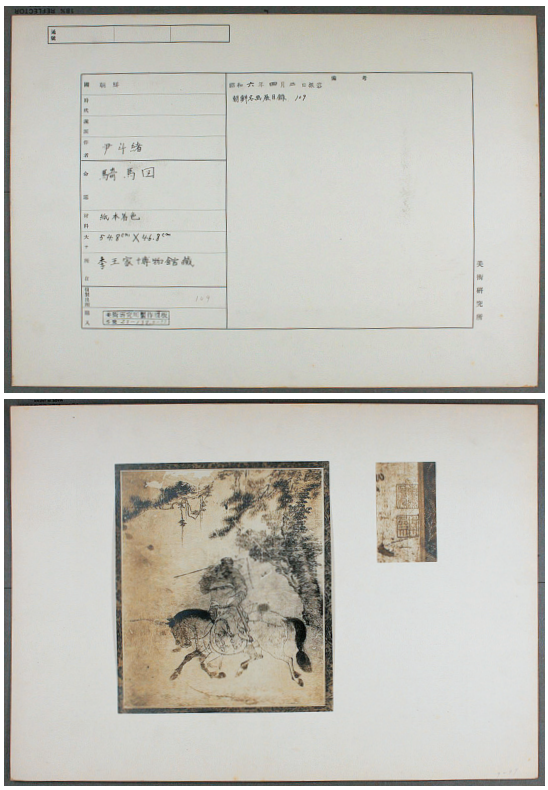


写真5、6　調査写真カード　表　裏

写真カードとは別にやや小型のカードに朝鮮時代絵画の写真を添付した写真カードが318件残されている。それらの写真は美術研究所の写真カードと共通のものである。この写真カード群は簡単な表紙をつけてグループ分けがなされる。このなかに昭和7年に李王家博物館の所蔵作品を調査したグループがあり、こうした機会に調査された絵画群ではないかと考える。また、このグループ分けの文字が関野貞の調査カードの墨書に近く、一部のカードに「せきの」印が捺されており、氏によって作成された写真カードであろうと考える。

この写真カード群の一つに「昭和七年七月調査選出　朝鮮時代絵画　李王家所蔵　原版美術研究所蔵　田野七之助氏撮影」と記された57件のグループがある。先の昭和7年9月1日付美術研究所の調査写真カードとほぼ一致する。おそらく関野貞主導で李王家の作品を調査し、写真カードを作成し、その原版を美術研究所に預けたものと考える。なお、これらの写真は昭和6年の朝鮮名画展覧会の出品作品とは重複しない。

朝鮮名画展覧会は日本での開催の後、同じ年の6月18日から4日間京城景福宮の後苑陳列館で再度「朝鮮古名画展覧会」として開催された。規模は132点と大幅に縮小されたものであった。

その後、朝鮮では1932年10月1日から5日まで「朝鮮古書画珍蔵品展覧会」を開催した。主催は呉鳳彬すなわち朝鮮美術館、後援は東亜日報社で出品は184点である。権幸佳氏によれば「東京展よりも量的には縮小されたが、質の面では優秀なものが多い点を強調した。（中略）出展された作品の大部分は収集家たちがこの2、3年の間に地方から集めたものであった。」とする。

調査写真カードでそのほかの日付のあるカードはわずかで、2件が昭和8年5月5日、1件が同年5月13日、そして、同年12月（日の記載なし）、「昭和11年9月9日於奈良国立博物館」である。

以上のことから、美術研究所時代に作成された朝鮮時代絵画のカードは展覧会やまとまった調査など作品が集約された機会に撮影調査されたものと推定する。逆にそれぞれの所蔵場所で撮影をした例は少ないと考えられる。

カードの所蔵先は朝鮮名画展覧会の所蔵者で、後に述べるようにこれらのうち多くの所蔵者について、関野貞は訪問して作品調査を行っている。

写真7　関野貞　写真カード

カードに記載された作品の現存は、韓国国立中央博物館をはじめとして多く確認されるが、中には現存を確認し得ない資料の写真もあるようだ(注17)。

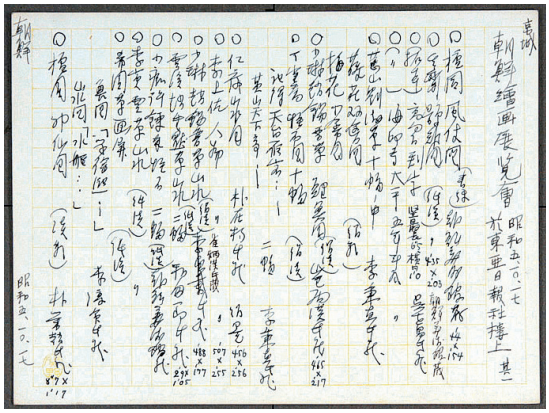

写真8　関野貞調査カード

### 3　関野貞調査カード（フィールドカード）

先述したように美術研究所の調査写真カードのほかに東京文化財研究所には関野貞直筆の調査カードが保管されている。カードは12.1cm×16.0cmの大きさで調査対象の作品や所蔵者ごとに分れ、各カードには日付が書かれる。文字は鉛筆で、現場で筆記されたように見える。

カード全体の構成を書いたカードがあり、以下のとおりである。

一、楽浪
　　石岩調
　　梧野調
一、在日本朝鮮絵画
一、朝鮮絵画
　　東亜日報展覧会
　　個人蒐筏家
一、朝鮮画
一、朝鮮絵画
　　李王家博物館
一、朴在杓氏蔵絵画
一、朝鮮絵画
　　総督府博物館
一、朝鮮工芸

カードには大正、昭和の年号と年が書かれるが、43、44と数字のみ書かれたものは明治の年と思われる。これらの年月日を日記に照らしてみると、関野貞が調査した日記の調査対象の内容を示していることがわかる。関野は朝鮮時代絵画については大正10年には李王家博物館、大正15年には総督府博物館の調査をすでに行っているが、とくに昭和5年10月の韓国行きから盛んに調査を行ったことがわかる。これは同月17日に東亜日報社で開催された「朝鮮絵画展覧会」を観覧したことと関連があると思われるが、日記から抜き出す。なお、調査カードの漢字表記は常用体とする。

（日記）　昭和5年10月日録
　10日　晴〃（博物館）。田中君ト共ニ博物館所蔵ノ絵画ヲ見ル。
　11日　晴〃。田中君差支、余ノミニテ前日ニ引続調査。
　13日　晴　博。絵画調査
　16日　晴　博。絵画ノ調査終ル。

総督府を訪れているところから、この博物館は総督府博物館と思われる。なお、総督府博物館の調査カードがあり、「大正15、10、9」日付のほか、年が書かれず「10月10日」、「10月13日」の日付のカードがあり、それらはこの昭和5年の調査内容と思われる。

10月17日
（日記）　晴　東亜日報社開催ノ朝鮮絵画展覧会ヲ見ル。
（調査カード）京城　朝鮮絵画展覧会　昭和五、一〇、一七　於東亜日報社楼上　其一
　〇檀園　風俗図（青緑）朝鮮美術館蔵　4.4×1.54
　〇玄斎　野雉図（紙淡）4.35×2.03朝鮮美術館蔵
　〇（拓本）高麗判字　竪最長6.5横内1.0呉世昌氏蔵
　　（以下略　全23件）

10月22日
（日記）　朝鮮絵画展覧会ニユキ、澤君ト選出セシ者撮影依頼。

10月27日
（日記）　高木徳弥氏別邸にて蒐集品一覧
（調査カード）京城　高木徳弥氏蔵遺物
〇檀園筆八幅屏風　青緑（以下略　全3件）
10月28日
（日記）（前略）後二時半晋州着
（調査カード）晋州　朴在杓氏蔵絵画
小品の部
〇玄斎花卉図　四
〇豪生館山水図（以下略　全61件）
10月29日
（日記）　晴　朝八時半朴在杓氏宅ニ至リ（朴尹錫氏案内ニヨリ）、同氏所蔵ノ絵画ヲ見ル。大小百余幅、特ニ仁斎李上佐等ノ優作ニ富ム。同氏所蔵ノ中ニハ大作傑作驚クヘキ者アリ。
（調査カード）
◎仁斎筆寒山拾得図　二幅対
牧谿風ノ筆意豪放雄技可驚傑作ナリ
（以下略　全17件）
昭和6年1月
（日記）
19日　朝鮮名画展覧会ニツキ式部学務局長ノ電報ニ関シ協議。
20日　前十時美術学校ニテ鮮画委員会開催、大体ノ方針ヲ決ス。
2月
11日　三越ニ朝鮮工芸品展覧（村上春釣堂主催）ヲ見ル
25日　后五時国民美術協会ニテ朝鮮名画展覧会委員会
28日　十一時博物館ニ至リ、朝鮮画ヲ見ル。午後一時美術学校蔵朝鮮画ヲ見ル。

これらは朝鮮名画展覧会に関連すると思われる。

3月8日
（日記）　晴嵐　逗子小宮三保松氏訪問、朝鮮画ヲ見ル。又支那画銅器等一覧。
（調査カード）小宮三保松氏蔵品（工芸品7件あり）
〇「朝鮮北画山水」（雲泊子落款アリ）鮮初の名画
落款は如何（以下略　全5件）
（日記）　3月
14日　東京府美術館ニテ朝鮮ヨリ送来セル絵画ノ荷解ヲナシ且調査ス、図録解説ノ計画ヲ立ツ。
16日　東京府美術館ニ至リ、支那工芸展覧会陳列。
17日　支那工芸展覧会開催、成功ナリ。
21日　晴　美術館ニ至リ、朝鮮名画展覧会ノ陳列ニ従事シ、后六時翠松亭ニテ新聞記者招待。再館ニ至リ陳列品整理、
22日　朝鮮名画展覧会開会式。前十時挙行。名誉総裁李王殿下令旨申候、
23日　李王殿下妃殿支那工芸展行啓ニ付、館ニ至ル。
24日　夜六時ヨリ朝日会館「朝鮮の夕」ニ出演「朝鮮の絵画に就て」
27日　午前、鮮画展。午後一時李王邸ニ往キ、安堅夢遊桃源図ニツキ李王、王妃両殿下ニ説明ヲナス。
28日　鮮展ニユキ陳列替、朝日新聞ノ為メ、「朝鮮絵画ニ就て、朝鮮名画展覧会ニ際シテ」脱稿
31日　鮮展
（調査カード）「帝室博物館蔵阿弥陀如来像」
（日記）　4月
1日　鮮展ニ岸清一博士ノ李巌、狗猫図ニ幅対出陳。
2日　鮮展。
3日　鮮展。
4日　鮮展。午後朴在杓、子息、呉鳳彬、朴尹錫氏ヲ案内シテ明治神宮、聖徳記念館、乃木邸及神社ヲ歴訪ス。
6日　鮮展、昨日終了、本日荷造ヲナス。

以上が東京府美術館での朝鮮名画展覧会の経緯である。調査カードはその後の日本における調査を記す。

昭和7年2月15日
（日記）　后五時学士会館、
（調査カード）東京　浅草寺蔵楊柳観音像
昭和7年2月2日田中一松氏調査

4月2日
（日記）　午前、東大寺転害門工事視察。后一時廿分奈良発
（調査カード）奈良　崔滉肖像　絹本着彩　天理図書館蔵

7月に京城へ行き、李王家博物館の絵画調査を行った。

7月16日
（日記）　驟雨　午前、小川君ト李博ニ至リ絵画ヲ見ル。
（調査カード）京城　李王家博物館　陳列ノ部
○檀園　童子□□図　絹彩（以下略　全29件）
7月18日
（日記）　驟雨　前九時小川君ト李博二至リ、絵画ヲ見ル
（調査カード）小品メクリノ部
○檀園　扇面薔薇胡蝶（二八八七）図　紙本彩色
（以下略　全14件）
7月19日
（日記）　陰　午前、李博、絵画調査。
（調査カード）○芝雲　葡萄図　一帖六枚　紙墨
（以下略　全14件）

昭和8年の国内調査

1月8日
（日記）　工芸図鑑原稿整理
（調査カード）浅草寺朝鮮絵画
◎観音主像（伝呉道士筆）絹本彩色密画
◎紫微北極図　絹本
6月14日
（日記）（記載なし）
（調査カード）
東京　大倉集古館群禽図　紙本彩色
東京　大倉集古館李朝画釈尊説法図

昭和8年8月12日に東京を発ち、14日から滞在した京城で、集中して朝鮮時代絵画の調査を行っている。

8月16日
（日記）　晴驟雨　前、李博平田君ノ案内ニテ李朝絵画調査。后二時、鮎貝氏訪問、自然万叡図巻ヲ見ル。
（調査カード）京城　李王家博物館蔵絵画　◎図譜ニ載ルヘキ分○美研ノ為メ
○謙斎金剛山図　十四枚　麻本淡彩
（以下略　全14件）
裏面「右昭和八年八月十六日李博ニテ郡山氏之立会調査始千点許見テ選定ス外格別ヨキ者ナシ」
京城　朝鮮絵画
金明国達磨像　鮎貝房之進氏ノ話　阿部充家氏所蔵（麻布三軒家）（以下略　全5件）
8月17日
（日記）（前略）后○時四十分京城発、小川君ト共ニ鳥致院下車。（中略）自動車ニテ公州着。
（調査カード）公州　趙東旭氏及竹熊武男氏蔵絵画
○小癡　菊、梅、竹　三幅まくり（以下略　全15件）
8月18日
（日記）　趙氏持参ノ絵画ヲ見（中略）山ヨリノ帰途、劉復烈氏所蔵ノ絵画数十点ヲ見ル。
（調査カード）公州　劉復烈氏蔵絵画　公州常盤町劉復烈氏
○玄斎武陵桃源図　紙本淡彩　9.8×1.64
（以下略　全7件）
8月20日
（日記）　雨　前九時小川君ト森悟一氏邸ニ至リ、鮮画一覧。中食後、城大ノ藤塚鄰博士ノ所蔵書画ヲ見、
（調査カード）京城　森悟一氏蔵絵画
（朝鮮貯蓄銀行頭取）
◎檀園 南極図（図）紙本淡彩（以下略　全11件）
8月21日
（日記）　陰　午前、博、総督府。午後、本町二丁目古城氏蔵品ヲ見、（後略）
（調査カード）京城　古城氏蔵絵画及工芸品
（故梅渓氏蒐集）
○屏風四枚折一双　戦争図
（以下略　絵画3件工芸5件）

8月22日
（日記）（前略）前九時徳光美福博士ヲ訪ヒ、同氏蔵画ヲ見ル、其蒐集ノ豊富ニ驚ク。午後、富田商会ノ蔵画ヲ見ル。
（調査カード）京城　徳光美福氏蔵絵画　其一
（車四軒町四八）
〇観音画像　疎絹彩色　鮮初ノ末カ
（以下略　全27件）
京城　富田商会蔵絵画　富田商会所蔵
〇薫園風俗画帖（題薫園伝神）総テ三十枚
（以下略　全6件）

8月23日
（日記）（前略）兪課長、小川君ト共ニ張澤相氏及金容鎮氏蔵幅ヲ見、（後略）
（調査カード）京城　張澤相氏蔵絵画（長橋町）
〇和斎　雞図（以下略　全21件）
京城　金容鎮氏蔵絵画（益善洞五六）
〇申夫人紫鯉図紙本墨画　粟は宋時加讃
（以下略　全6件）

8月24日
（日記）晴　鮎貝氏邸ニテ安奎応氏持参ノ絵画ヲ見ル。
（調査カード）京城　鮎貝氏邸ニテ展観絵画
〇蓮禽風俗画　左右二枚（中略）（安奎応氏蔵）
（以下略　全7件）
京城　朴栄喆氏蔵絵画　昭格洞一四四
〇卞相璧猫図　紙本彩色
樹下北猫一児猫三樹上畠雀繰リ
（以下略　全16件）

8月25日
（日記）晴　午前、総督府及博物館。午後、李漢福氏方ニ至リ絵画ヲ見ル。
（調査カード）京城　李漢福氏蔵絵画　宮井洞四〇
〇競斎胡人狩猟図　紙本淡彩　小品　佳作
（以下略　全29件）

8月26日
（日記）午前、博。午後、李漢福氏ノ案内ニテ李秉直氏所蔵ノ絵画ヲ見ル、其蒐蔵ノ豊富ニ驚ク。
（調査カード）京城　李秉直氏蔵絵画　其一（鳳翼洞一〇）
〇蕙園　雨後芭蕉図　紙本淡彩色（以下略　全69件）

8月27日
（日記）雨　午前、諸岡氏来訪。午後、安奎應氏ノ案内ニテ小川君ト李胤栄ヲ訪ヒ、蒐集画ヲ見ル。
（調査カード）京城　李胤栄氏蔵絵画　竹居町三丁目三番地六七
〇伝金明国　大江征帆図　紙本淡彩
（以下略　全13件）

8月28日
（日記）晴　朝、林尚鐘氏来訪、絵画法帖等持参。
（調査カード）林昌（ママ）尚鐘氏蔵絵画　林尚鐘氏備□室ニ持参
〇伝申夫人筆絹本着色蓮芦鷹□図（メクリ）
（以下略　全5件）
京城　李漢福氏蔵絵画
〇心田墨牡丹図　紙本墨画（以下略　全3件）

8月30日
（日記）后、李漢福氏ノ東道ニテ李鍾翊氏宅ヲ見ル。（中略）又鮮画若干ヲ見ル。
（調査カード）諸岡栄治氏持参セラル
〇檀園　北極星？（ママ）（寿星？（ママ））図（以下略　全3件）
京城　李鍾翊氏蔵絵画（三角町三六）
〇小癡　秋日山水図　紙本淡彩（以下略　全22件）

8月31日
（日記）驟雨　前九時、安奎應氏ノ案内ニテ柳来禎氏ノ絵画ヲ見、博物館ニ至リ、後二時小川君ト徳光博士宅ニ至リ、同氏蔵絵画ヲ見ル。
（調査カード）京城　柳来禎氏蔵絵画（楼下一一四-二）
〇崔北山水図　二枚　紙本淡彩（以下略　全3件）
京城　徳光美福氏蔵絵画　其一
〇箕野　画帖　花鳥山水　松鷹等ノ図アリ
（以下略　全40件）

9月1日
（日記）陰夜雨　前九時博物館。ソレヨリ李王家博物館ニユキ、平田君ノ好意ニヨリ絵画調査、后五時ニ至ル。
（調査カード）京城　李王家博物館蔵絵画　其一
◎松石帖　李教翼筆　人物花蝶図（以下略　全65件）

9月2日
（日記）雨後晴　午前、李博絵画調査。

（調査カード）京城　李王家博物館蔵絵画　◎ハ図譜
　　○ハ美研ノ分
◎北山山水画　紙本淡彩　二幅4（以下略　全20件）
日付のない調査カードに「李王家博物館絵画」62件

昭和9年には日本所在の韓国絵画調査を行った。

3月28日
（日記）　前八時十五分名古屋発、九時五一分津着。
　　食後、属長谷川利市氏ノ案内ニテ公園内石
　　燈、藤堂家石塔婆及長谷寺石仏、浄明院石
　　仏、悪魔堂、阿弥陀寺等ヲ見、西堀端、菅
　　野大作氏方ニテ嘉靖ノ寧辺風景屏風ヲ見ル。
（調査カード）三重　浄明院　　工芸品　2点
3月29日
（日記）　菅野氏ニ至リ、再寧辺屏風ヲ見、
（調査カード）三重　菅野大作氏蔵嘉靖屏風
4月3日
（日記）　九時半ノ列車ニテ談山神社ニ往キ、（後略）
（調査カード）奈良　談山神社朝鮮山水屏風
4月9日
（日記）　晴　前四時半神戸着。九時京都着。
（調査カード）兵庫　江善寺薬師三尊像
4月14日
（日記）　雨　安間君、重森両君ト博物館ニ至リ、遼
　　塔撮影朝鮮仏画及東寺名宝展、染織展ヲ見
（調査カード）京都国立博物館　出陳品　5件

以上のように、調査カードは日記の記述の調査内容を記す貴重な記録であり、関野貞の調査活動を克明に知ることができる。これらを概観すると氏は昭和5年以降、朝鮮時代絵画を機会あるごとに集中して調査している。カードの調査内容の分析はこれからであるが、いくつか気づいた点を記す。

李王家博物館や朝鮮総督府博物館など日本が収集にも関係した施設ばかりでなく、1930年代朝鮮時代書画の蒐集が盛んになった京城を中心とした個人の所蔵家も丁寧にまわり、調査を行っている。この背景には関野が統治下朝鮮の美術史を編纂しようという意図があったためかと思われる。

一日に大量の書画を調査し、ともかく全部見ようとする姿勢に驚くが、本来美術史家ではなく調査カードを見ても作品名と作者を記載することがほとんどで、いわゆる所見や描写の記述は見られない。調査の作品名の上に○、◎あるいは○に・を打ったものなど、印が付されている場合がある。これはカードの中に「◎図譜ニ載ルヘキ分○美研ノ為メ」とあり、図譜は朝鮮名画展覧会のカタログであろうか。また、「美研」は美術研究所のことで、美術研究所すなわち現在の東京文化財研究所の所蔵カードとして記録しようとしたものであろう。

また、書画人の伝記が編まれなかった朝鮮時代の特性から画人の判別が難しかったかと思われるが、関野は的確に作者を判別している。すなわち、朝鮮時代の画人の作品、人名（画号）に通じていたと思われる。これは氏の交友や学習によるものであろうが、この文化財研究所のカードについても、これを活用して朝鮮時代絵画の研究を進める研究者が少なかったことが悔やまれる。

これらの資料をはじめ、近代と現在の資料の様相を比べつつ、関野貞の調査状況を把握すると共に、現存しない資料について所蔵者ほか知りうるデータを記録し、また、東京文化財研究所の写真データとも照らして、写真資料の存否を確認したい。

関野貞調査カードのなかで、絵画の所蔵の履歴としてとりあげるべき情報は夢遊桃源図の所在についての記述であろう。これには昭和五年十一月四日の日付がある。（なおこの日は関野貞日記には行動の記載がない。）所蔵は「園田才治氏蔵」となっている。カードには明治26年の鑑査状の写しで「鹿児島市　嶋津久徴」と書かれ、以前の所蔵者が知られる。それにつづいて、「此画ハ大阪市住吉区天下茶屋聖天坂口、園田才治氏蔵ナリ　三千円ニテ質ニ取リシ者ナリトイフ　氏は鹿児島県人ナリ新納君ハ同郷、新納君ノ注意ニテ内藤□方氏ニ示シ、始メテ其稀有ノ画ナルコト明ラカナリシトイフ」。「新納君」は日本美術院の新納忠之介であろうか。また、この絵は「朝鮮名画展覧会」の際も出品が難しく、会期半ばに展示を終了したことを伝える。

## 結語

東京文化財研究所に所蔵される朝鮮時代絵画に関連する調査写真カードによって示される日本近代における朝鮮時代絵画の調査研究の様相は、朝鮮名画展覧会の開催に象徴的に示される。これを推進した関野貞の動向からは、真摯に朝鮮時代絵画理解に努める姿勢を見出すことができる。朝鮮名画展覧会は日韓合わせてもおそらく最大規模の朝鮮美術の展覧会であったようだ。しかしながら、その後は日本においては朝鮮美術の展覧会は大規模で行われず、一過的な催しの観はゆがめない。東京文化財研究所に残される写真調査カードの多くはこの展覧会の出品作品を記録したものであった。

また、関野貞が朝鮮時代絵画について書き記した調査カードからも、そのようすが伝わる。氏は比較的短期間に統治下朝鮮と日本の所蔵者の作品を閲覧し、作品名、作者などを記録した。

朝鮮名画展覧会ののちに脇本楽之軒『朝鮮絵画集』（1933年）など、朝鮮時代絵画に関するいくつかの資料集、刊行物が発行されたが、日本において研究の高まりや広がりは見られなかったように思われる。

今後の課題としては、こうした関野貞および朝鮮名画展をめぐる日本での活動に加えて、統治下朝鮮での朝鮮時代美術とくに絵画、（書画と言ったほうがよいだろう）の収集、展示など関心の様相を合わせて理解する必要があろう。

また、近代の朝鮮時代美術あるいはそれ以前の美術の収集、展示には李王家博物館、朝鮮総督府博物館などでの活動があろう。これらの施設で近代早くに収集が行われ、朝鮮美術のコレクションの中心となった。この収集がどのように行われたかを検証することが必要である。

現代においても日本では朝鮮時代絵画についてははじめにも述べたようにその儒教的な精神の反映として、鑑賞、理解されることは稀であろうと思われるが、近代において朝鮮時代絵画の顕彰につとめ、調査を行った関野貞の事績をこれらの調査カードから確認すべきである。また、日韓を中心に今日所蔵される朝鮮時代絵画の作品群が近代においてどのように収集されたか、その様相を調べる必要がある。

近代における朝鮮時代絵画の認識や現代に所在する作品の出処など、今回のカードの調査から多くの課題が考えられる。今後は韓国の研究者も交えて、近代における朝鮮時代絵画の収集・所蔵や展示についての実情、背景などを探っていく必要があると考える。

## 注

1　洪善杓「朝鮮　初期繪畫의思想的기반」『朝鮮時代繪畫史論』韓国：文藝出版社1999年
2　五十嵐公一「江戸時代の朝鮮書画情報」『アジア遊学』120　2009年3月
3　この調査には東京文化財研究所の小林達郎氏、橘川英規氏、井上さやか氏にご高配いただいた。
4　東京大学総合研究博物館　特別展示『東京大学コレクションXX：関野貞アジア踏査—平等院・法隆寺から高句麗古墳壁画へ』展覧会図録　2005年
5　権幸佳「1930年代古書画展覧会と京城の美術市場　呉鳳彬の朝鮮美術館を中心に」『日韓近代美術史シンポジウム報告書　都市と視覚空間—1930年代の東京とソウル』明治美術学会　2009年1月15日
6　『関野貞日記』関野貞研究会　中央公論美術出版社　2009年
7　「東亜日報」1931.4.10.「朝鮮名画展覧会　東京美術館を終えて」訳　韓国国立中央博物館洪彰華
8　『東京都美術館80周年記念誌　記憶と再生』東京都美術館　2007年
9　石井柏亭「朝鮮名画展覧会目録」国民美術協会　1931年『近代日本アート・カタログ・コレクション』の中にこの目録が復刻されている。
10　「日本水墨画に及ぼせる朝鮮画の影響」『美術研究』28号　1934年
11　権幸佳　前掲論文
12　『李王家博物館所蔵品写真帖』緒言　1933年
13　伊藤純「李王家博物館開設前後の状況と初期の活動」『考古学史研究』第9号2001年5月
14　『국립중앙박물관』国立中央博物館　2007年
15　五十嵐公一「『槿域書画徴』における『古画備考』の位置」『江戸時代における〈書画情報〉の総合的研究—『古画備考』を中心に—　平成15–17年度科学研究費補助金基盤研究(B)研究成果報告書』2006年
16　「朝鮮名画展覧会目録補遺」
17　共に調査した徳成大学校朴銀順教授の示唆

## 写真出典

1　『東京都美術館80周年記念誌　記憶と再生』東京都美術館　2007年より転載
2、3　『국립중앙박물관』国立中央博物館　2007年より転載
そのほかの写真は渡邊撮影

本論は平成26年度の韓昌祐・哲文化財団による研究助成「近代以前、日本における韓国書画の受容の様相について」の成果の一部である。